

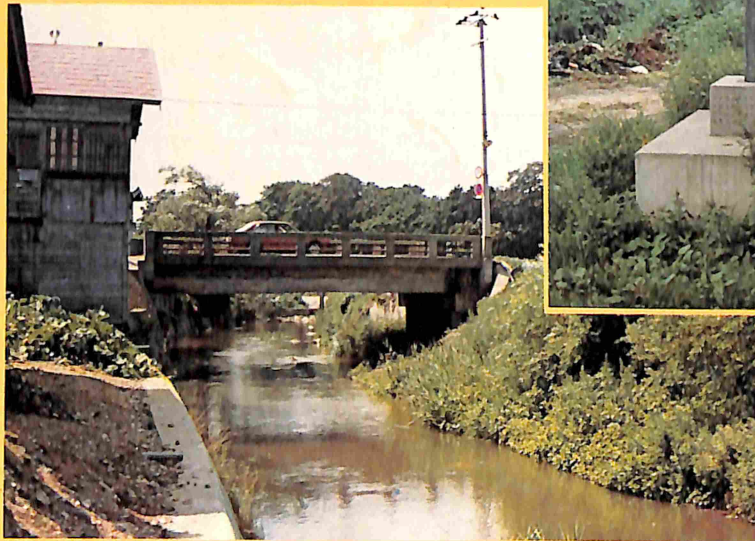
ふるさとの
かたりべ

第二集

青森県無形文化財指定
嘉瀬奴踊り発祥地碑



嘉瀬と金木の間の川コ……ゆかりの奴橋



発行 嘉瀬ふるさとを探る会

表紙碑文中 嘉瀬の奴踊りの由来

津輕四代藩主信政公が金木新田の開拓事業に着手したのは元禄十二年（一六九九年）で宝永二年（一七〇五年）にこの大事業の完成を見た。この新田開発は諸国から（とくに越後・能登及び京阪地方）の移民が中心になって進められた。田植時期には他国民の来遊や、交易商人などの往来が激しく、殊に開拓事業成就祈禱のために「願人坊」が出家大社や、大阪住吉神社の神事である田植踊りを勧進して盛大を極めたと伝えられる。

田植踊りは、田の神の早乙女を中心に太郎治、弥十郎の二役が、歌声も高らかに、また楽しく踊ったもので、なかでも弥十郎は奴の衣裳で飾り、その前後には荒馬、大刀振りを伴う仕来りであった。

屋敷から移民鳴海善右衛門の子孫、伝右衛門の忠僕が主人の不遇を慰めるために踊ったのが始りたとされる。奴踊りの伝説も、前者を田主（太郎治）たるじ、後者を弥十郎（やんじゅうろう）小作人の代表者と見てのことである。

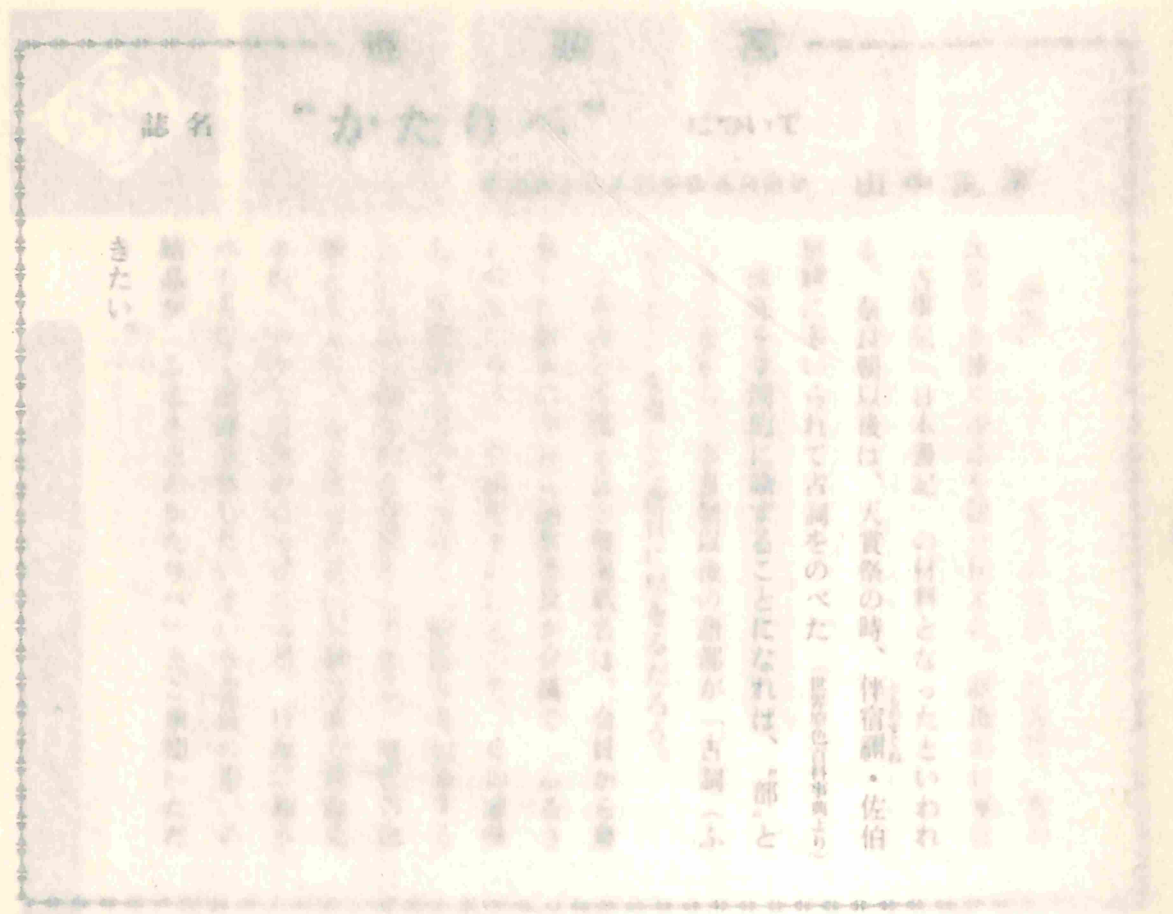
この弥十郎の奴たけが、いつしか嘉瀬地方に残り、嘉瀬の奴踊りとして村民に受け継がれて現存し、この系統の踊りとしては本上の北限となり、また他に例のない動きをもつ特異な踊りとして尊重されている。昭和四十四年十二月一日に青森県無形文化財（技芸）として指定されたが故ある哉と申すべきであろう。また歌詞には、

～嘉瀬と金木の間の川コ、石コ流れて、木の葉コ沈む

という痛烈な風刺を込めた文句が有名であるが、これは、誠実な者が恵まれず、狡猾な者は世にはびこる世相を正そうとする嘉瀬の奴踊りの真髓を語るものである。近世嘉瀬の奴踊りは全国的に有名となったが、この事実は不世出と讃えられた『民謡の神様嘉瀬の桃』こと黒川桃太郎氏の努力によるところである。

昭和四十九年八月十日建之

湯本正美寄贈（嘉瀬出身）



誌名

“かたりべ” について

前嘉瀬ふるさとを語る会会長 山 中 正 津

「語部」（かたりべ）文字のなかった古代、有力氏族の系譜や説話を語り伝えた。語部の口承は「古事記」「日本書記」の材料となったといわれる。奈良朝以後は、天賞祭の時、伴宿禰・佐伯宿禰に率いられて古詞をのべた（世界原色百科事典より）語部を学問的に論ずることになれば、「部」ということから、奈良朝以後の語部が「古詞（ふるごと）」を奏した役目に尽きるだろう。

ふるさとを語る会の機関紙名は、会員から募集した数点の中から編集委員が合議で「ふるさとのかたりべ」が採用されたもので、その意味も、学問的なものではなく、物語りを伝承するという最も概念的な発想からである。時代の進展とともに、ふるさとの古い伝統行事が簡略化され、やがては失われてゆく今日、口承に頼るべくもなく記録を残したいという会員の希い結晶が「ふるさとのかたりべ」とご承知いただきたい。



かたりべ 第二集 目次

表紙 嘉瀬奴踊り発祥碑

碑文 嘉瀬奴踊りの由来 裏面表紙 柿本人麻呂尊像

巻頭言 誌名かたりべについて

ふるさとへの短信

山中正津 1

土岐兼房 8

追憶の津軽わらべ唄

沢田 薫 7

田崎清作書

炉端談話

沢田勝衛 4

木吉田

『エジコ』

沢田政孝 5

題字 = 書道師範

借子と食物

秋元幸之進 6

木下清一

かたりべ 往

23

嘉瀬の足跡を尋ねて

23

紙上答論ゼミナール 36

◎義経は衣川で果てたのだろうか?

沢田 薫 原田万治

集 ◎喜良市娘と嘉瀬若者、または喜良市若者と嘉瀬娘の源流は

木村治利 木立久二

◎私達の祖先はアイヌ族か蝦夷人か?

木立民五郎 木下清一

特 ◎嘉瀬十年とは?

佐野 洪 山中正津

◎私達の祖先はアイヌ族か蝦夷人か?

小山内嘉一郎 須崎正敏

嘉瀬二十三観音石像 82

民謡愚考 木下清一 50

集 奴踊り芸能成立過程 木立民五郎 51

逸子踊り 小山内嘉一郎 52

特 嘉瀬の奴踊りと歴史的背景 不村治利 53

民謡を育てた嘉瀬の唄人 須崎正敏 60

私の太宰治 木立民五郎 66

中柏木断片 原田万治 70

狐崎と嘉瀬 秋元惣之進 30

庚申縁起 14 34

佐野洪志備録 14

七福神物語縁起解説 49

獅子舞語り祭文 64

佐野 洪 編

歴史ポット

金木館守寝返る 13

領界の状・地頭職 6

津軽観音考 83

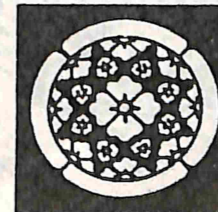
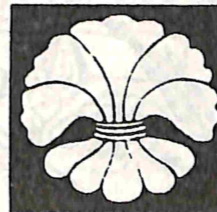
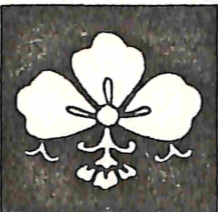
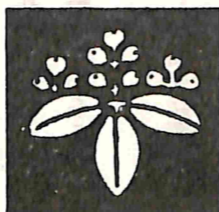
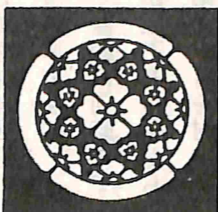
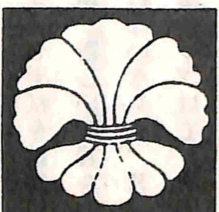
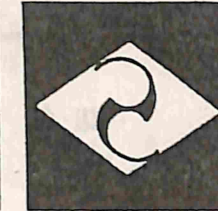
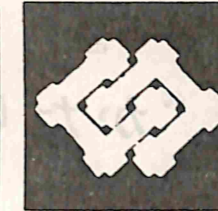
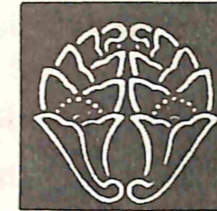
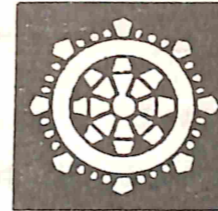
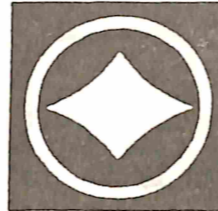
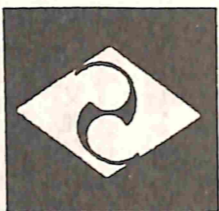
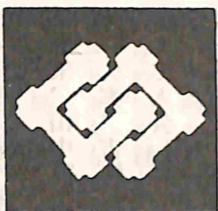
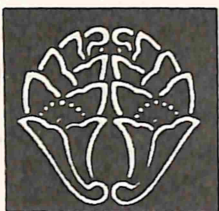
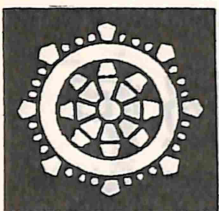
『かたりべ』への便り 94

一口メモ 63

ルポ沢金 8

踏査記録 II 嘉瀬賽の河原地蔵尊

折込み
中柏木城跡図絵
御遷宮行列図



炉端談話

衛勝田 沢

冬の一曰叔父沢田武男をおとつれたとき、叔父が若いころ、青年団 若者頭として活躍した追憶を、ポツリ、ポツリと炉端で語っていたのを、私なりに『かたりべ』の一頁にまとめた。

昭和八年、私が十七才の頃で、嘉瀬はまだ村でした。当時進学できる人は嘉瀬村でも何人もいなかった。木立民五郎氏が旧制青森中学校を卒業して村に帰って来ていました。木立氏は間もなく、『嘉瀬愛郷会』という会をつくり、木立氏を会長に、平川清作、秋元惣之進、外崎好栄、山中清市、小山内繁勝、山中源太郎、須崎佐之造、鎌田清、山中久弥、吉崎正光等の諸氏で、その他沢山の若者達が愛郷の精神にもえて入会したものでした。

そして、元村長工藤保次郎さんの墓地のある、からかさ松のところ今でも古い小屋が残っていますが、その小屋に毎晩集まり、剣道を習い、又縄なりをしたり、雪道を補修したり、色々な仕事をしたものです。

その頃、木立氏は『嘉瀬は、他の村に比べて十年遅れている』とよく云った。『嘉瀬十年』今でも耳の奥に残っています。この十年の遅れをなんとかして、十年進んだ嘉瀬にしたい。また、しなければならぬと、常に思っていたものでした。

私が十九才の冬、若者頭の選挙がありました。私もその選挙に立候補、運よく当選。古町から私と舛甚半四郎、派立から木下留蔵と鳴海太郎の四人でした。そして、昭和十一年の春、例の虫送り行事がせまでも唄ってけれど、注文のお花に追われたものです。

こうして虫送りの行事も、この年から古町派立と合同された形に改善、また盆踊りもそうでした。

以前嘉瀬の盆踊りは、夜も十二時を過ぎないと踊らないもので、十二時から踊りはじめて、夜の明けるところまで踊り続け、私達は、踊りが終るとすぐに、馬の草刈りを、藻川まで刈りに行ったものです。昼は眠って、晩十二時になると踊りに出かける。この繰り返しを何んとかしなければと、盆踊りを晩の九時から始めて、十一時には踊りを終るように時間を決めた。

当時は、前町の白取勇治さんの湯屋の二階を借り、そこに賞品を置き、二階から盆踊りの審査、十一時になると、私と小山内繁勝がラッパを吹いて踊りの終りを告げたもので、それには当時の嘉瀬駐在の巡查三上さんも一役買って協力したものです。

十一時、ラッパの合図で、踊りの輪はぱっとくずれ、盆踊りを満喫した嘉瀬の村人達は、それぞれ家路に散って行きました。私の若い頃の一駒です。現在は盆踊りも、虫送り行事も淋しくなりました。今の若い者はエネルギーの発散をどこに述べているのだろうか。古い良き時代の村の伝統行事は、何時までも村に残したいものか。

~~~~~  
かたりべ  
~~~~~

『エジコ』 沢田 政孝

エジコは嬰兒籠のこと、農村では古くから使われてきました。現在『エジコ』を使用しているのは嘉瀬で、A氏の孫に使用している。今時珍らしい。A氏の話しを聞くと、嬰兒が使用、二才になるが、

つてきました。

当時若者頭の仕事は色々ありましたが、八幡宮例祭の夜宮の踊り、お盆の踊り、それに虫送りの行事がおもな仕事でした。

私達四人は、とにかく嘉瀬村の虫送り行事から改善することを考えました。これまでは嘉瀬村を二分して、古町の虫送り、派立の虫送りに分かれて、古町は豆絞りの手拭を鉢巻にして、派立は七手拭を鉢巻に、一杯気げんで跳ねるのですからたまりません。朝、新しい肌を着て行くのですが、虫送り行事が始まって一時間もしないうちに、若者のぶっつけ合いで肌着はぼろぼろ、鼻血は出る、頭にコブはできるのは、らんぼうなものでした。若者のある親達は、とても見て居られないような有様で、それが毎年毎年繰り返されてきたのです。

そこで、毎年こんな事を繰り返しているのでは、嘉瀬は何時までも『嘉瀬十年』から脱け出す事はできない。なんとか虫送り行事から改善しなければと相談し合い、荷車に舞台を作り、唄と踊りを村中に披露したらと云うことになって、さっそく鎌田稲辰さんに相談したところ、『唄と踊りは私がなんとかします。』に 話がまとまり、虫送りの二日前から舞台作りにとりかかった。

荷車二台を並べて舞台を作り、いよいよ虫送りの当日、鎌田稲辰一行が、唄い手、踊りを披露し、その車を古町と派立の人々が合同で引っぱり、各町内を廻ったのです。年をとったお婆さん連中、『今年の虫送りア ナンボ イゴト ヤッターバー』と、あちこちから云ってるのが聞えてきました。

また、各商店の、原田辰与、工藤林造、高杉商店、神島安兵衛、花田精米所の前では、私の店の前で唄ってけれ、踊ってけれ、うちの店午後一時ごろから午後五時ごろまで『エジコ』に入っているそう。午前中は部屋を走り廻り、午後になると疲れて 眠くなると一人入り、玩具を持ちながら自然の眠りに入るそう。

『エジコ』は二種類ある。藁を直径七〇センチ、高さ四〇センチの筒型に編上げたものと、木製は、楕円型のものがある。

私も『エジコ』に入れられた記憶がある。エジコから出られないように、小さな布団を肩から巻くようにして、その上に細長い紐で結ぶ、母は田圃や野良で働らき屋に授乳にくるまで、排泄物も『おむつ』にそのままにされ、それでも尻がタダレないよう『エジコ』の底に、稲藁シビを敷き、木灰二寸ほど入れ、その上におむつを敷いて、三才か四才ぐらゐまで入れられていた。

『誰ガァ 居ねが』と家に入っても返事が、さらに奥さ入って『誰モ居ねガァ』と声をかけると『エジコ』に入っていた子供が、『アパァ田圃サ行た』と答えが返ってきたものだという。いそがしくなると子供も『エジコ』に入って留守番である。

田圃がいそがしくなると母親は、野良に『エジコ』を持ってゆき、子供を入れて置き、働らきながら授乳したそうである。

現在『エジコ』を製作できる人は、金木町では、川倉の大佐賀三次郎だけになってしまった。

『エジコ』を作るには、一日のうちに製作しないと、入れた子供が育たないといわれ、何人もかかって一日で仕上げたとか、『エジコ』の中を空しておく時は、その中に石や刃物を入れておかなければならないとか、他家から借りた『エジコ』は 催足されるまで返してはならないとか、迷信なのか約束事があったという。

今は『エジコ』を使用する家庭もなく、納屋の奥隅に忘れ去られてあるだろう。」

べり来
かたり往

借子と食物

秋元 幸之進

明治・大正から昭和の中頃まで、貧農の子は大低借子にだされた。地主は、一町歩当たり一人の借子を雇ったもので、嘉瀬の地主では十人の借子を雇っていた。

昭和の初期、二人の少年が嘉瀬の某地主の処に雇われて来た。借子米(報酬)は二人同じで、年間米俵四俵であった。

ひとりは藻川からきた万蔵(仮名)といつて十三才、五尺六寸である。当時では大男であった。もう一人は川山からきた千吉(仮名)で十三才、背が小さく四尺八寸の小男であった。(当時は『五尺三寸出ず入らず』といつて五尺三寸が標準とされていた。)

二人の最初の仕事は脱穀作業でした。千コキ(櫛の刃のようになった部分に稲を入れて、引張って穀を落す)で脱穀するもので、小男は一度に一束づつこいだが、大男は一度に三束づつ入れてこいだものだから、結局疲れ果て、小男に負けてしまった。

ある冬の日、二人は堆肥運びをやらされた。小男は堆肥を桶で田圃に運搬していたが、力がないので積上げ下げに大変苦労していた。大男は堆肥マルギ(藁で包む)をさせたが、ほどけてまるでだめ、そこで、今度は三本鍬で堆肥掘りをさせたが、力持ちなので、三本鍬の刃を一〇本も折ってしまった。三本鍬を借りる処がなくて、やっと隣り

家から一丁借りてきた。小男に交代させて堆肥を掘らせたなら、サワサワと手際よく、早くマルギ終ってしまった。又、大男もトントンと堆肥を運び、作業は忽ち終ってしまった。

大男は、タラ汁が好きで、タラの身だけ、すくいあげては食ってしまったので、みんなから憎まれていた。

田草取りは二人にとってきつい仕事であった。二人にわからぬようにシケ人は、除草する田圃の隅っこに酒徳利を堀の中に埋めておいてどれ位い仕事をしたかを調べていた。

夕方小男は徳利を見つけて帰宅すると、酒一合と、タラ汁の身を盛って食うことができたが、大男は、田の草取りが粗末だと叱られ、酒も、タラの身も食えなかった。

歴史ポット 領界の状

十三に領する行来川(岩木川)山田川を境として、東中山峰を境とす。以北田光入江十三町。浮大刀境として十三殿領と定め、浮大刀川以西海添、河北境、南行来山、仲邑川以西嶽白神山を境と定め南東に残して一円、藤崎管領と定候也。建保四年七月(西暦二二一六年鎌倉幕府実朝時代)

地頭職

北条義時、平広忠を平賀郡の内岩楯に地頭代職、更に承久四年三月曾我五郎推重を平賀郡の年貢代官たらしむ

幼児期 祖母に抱かれて聞いた 委ねたい。題はない。

足汚れだら 川さ行つて

すすげ

すすげば 流される

流されだら

葦の葉さ つかまれ

つかまれば 手切れる

手切れたら 塩つけろ

塩つければ 沁みる

沁みれば 治る

治れば どんでもない。

注()内は私が知っている読み方

以上のように 何が何やら訳ら

ないが、祖母から聞いた わらべ

唄である。当然私達の世代の方は

聞いたこともあるのではないか。

内容はともあれ、先祖からのかた

りべは大切に子孫に残してゆくべ

きではないかと、書いてみた。

ほかに鞠つき唄などもある。

私達の『かたりべ』は、こんな

ことも利用したいと思う。ともあ

れ、この唄を、初めから終りまで

訳って、サッパどしている。

追憶の津軽のわらべ唄

沢田 薫



子守唄になるのか、又わらべ唄になるのか、断片的に口の端に出てくる唄がある。題はなんと云うのかも訳らない。それも、ところどころだけである。

トンビ 車の かねたたき

かねこねで

井戸の中 廻ったきゃ

青い虫 十二

黒い虫 十二

十二の中さ

腹へったら 田作れ

田作れば 足汚れる

この唄を系統立てて ずっと続

いている筈。いつか、誰から聞

きたいものだ、絶えず思ってい

た。ところが、過日弘前市の或る歌人の方が、陸奥新報に、この唄を載せてくれた。幼児期の揺籃に

カラス ガアって かん三郎

トンビ 車のかねたたき

かねこ ねして

葦の中 まわったきゃ

唐竹 一本みつけた

それ じゃぐど割ったれば

青い虫 十二

黒い虫 十二

十二の中(さ)

あし毛の駒コア

あっちゃ行つても

キッチョ キッチョ

こっちゃ来ても

キッチョ キッチョ

キッチョ キッチョに

はやさいて

馬喰町のネズミコア

油コ けろつとなめた

なしに(て) なめた

腹へつてなめた

腹へったら 田作れ

田作れば 足汚れる



即へるさの菓子の製法

土岐兼房

ふるさとへの信

『遠きにあ
りて……』

当時、洋菓子と言われたコンペ糖、ビスケット（色の糖かけ）から、金木・五所川原から卸に来る駄菓子類（飴玉、落がん、みそパン、麦まんじゅう、洋かん、桃、もなか、金つば等）初めの中はビスケットと洋かんをよく食べたが、その中、マンネリ化して、そんなに甘いと思わなくなった。

真実『これは甘い』というお菓子に出合ったのは二十才の時、金木虎屋の『甘露梅』の発見に始まる。甘い『あん』を薄い羽二重餅の衣に入れ、それを軟いシソの葉に包んだものである。シソの葉は長い間、梅干しの中に漬けたものだろうか、ほんのりと梅の香がして、口の中に入れると、舌の上で、とろけ始める。のどを流れて行くのが、あまり早いので、そのまま通過させるのは惜しい感じだったので。

私はその頃、中里小学校の教員をしていたが、村に帰ると必ず、その甘露梅を買っておみやげとした。やがて、先生方も、この銘菓の顧客になった。

その後、私は、金木・薄市・嘉瀬と三つの学校を渡り歩いたが、その間も、機会ある毎に、この銘菓の舌ざわりと味も楽しんだ。

嘉瀬のホーハイ節

『世界で珍しい裏声の唄』

裏声だけの唄は西洋でも珍しく、『ヨードル』というのが一つあるだけ。

日本でも『ホーハイ節』があるのみで、これは、ヨーロッパの『ヨードル』とは全然関係がなく、わが『ふるさと』が生み出した唄である。

民謡の宝庫、わが『ふるさと』

津軽民謡の宝庫、我がふるさとには、その鬼才『もも』の生まれ育った地でもある。

『もも』の人間像については、断片物には世上流布されているが、彼の生前を實際目にした村人は、もう村にはいないのだろうか？ 祖父母からの聞き伝えでもいい、真実の『もも』の姿を残して欲しいものだ。私の聞き知っている村の民謡歌手は

- 小山内漫遊
- 木村治一郎
- 鎌田 稲辰
- 鎌田 稲一
- 吉幾三一家
- 山中 一雄

の方々であった。

沢金=沢田国美氏夫妻

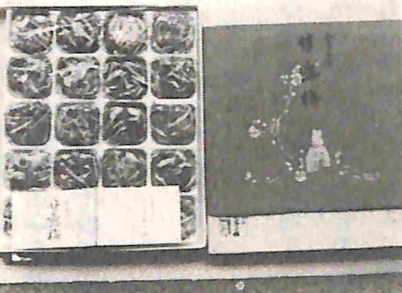


ルポ沢金

綴方教室の土岐兼房先生が、こよなく愛した味だった郷土の銘菓『甘露梅』。金木虎屋の伝統を今に受け継いでいる沢金菓子店。

嘉瀬では沢金と言えば、沢田菓子店でおっている。その主人が嘉瀬の人沢田国美氏である。

第十八回全国菓子大博覧会褒賞之證
沢金菓子店
甘露梅
名誉金賞
沢田国美殿
右審査の成績により之を授与する
昭和四十八年十二月二十五日
名誉総裁高松宮宣仁親王印



銘菓甘露梅

『これは甘い』菓子に出合った菓子が『甘露梅』であったと回想する。その甘露梅の製造元を尋ねる。

『私は、あくまで甘露梅は金木虎屋の伝統であるシソの香りと、アンの味覚を守り、私なりの研究で、今では買ったお客さんが二ヶ月は保存できるように防腐剤なしで造る。津軽の郷土の味覚は、これからも研鑽してゆく。いま長男が東京製菓学校で修業中で、三代目にも伝承してゆく』と、話しながら沢田夫妻の手は、アンをこねる手を休めない。根っからの職人気質が、まだ嘉瀬に残っていた。虎屋の名は無いが、伝統の銘菓は嘉瀬に生かされている。

昭和十四年二月、日本の南の最は台湾に渡ったが、戦争が終って久しぶりに引き揚げて来ると、再び甘露梅に巡り合う事ができたのである。
しかも、これは、金木虎屋の製造ではなく、ふるさと嘉瀬の菓子舗沢金の製造であった。虎屋時代は、シソの葉に包まれたまま裸だったものが、今は透き通るような薄いビニールの袋に入れられ、外気に触れる心配もなくなった。何か貴重な宝物でも封じ込まれているようで、床しい感じである。
舌ざわりは、更に滑めらからで味は快的、茶菓に用いると、一層重宝。それに沢金の甘露梅は、暑気にも耐え長持ちができるという点である。もともと作り立ての物を食べるに越した事はないが、何かの都合で、手を着けるのが遅くなっても、風味にはいささかの変わりないというから全く素晴らしい事だと思ふ。
沢金菓子舗主人は二代目であるが、一代目父親金作さんに劣らぬ、職人氣質の強い男で、新しい味を生み出すために寝食を忘れるという程の意地っ張り。仕事に打ち込む事を自己の使命と考えているようなタイプの人間であった。